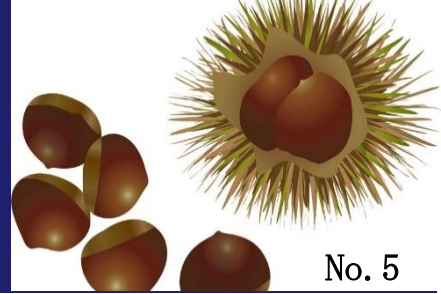


協力隊通信：美和地域

岩国市美和総合支所 農林建設課

地域おこし協力隊 沖野 修吾

TEL0827-96-1112



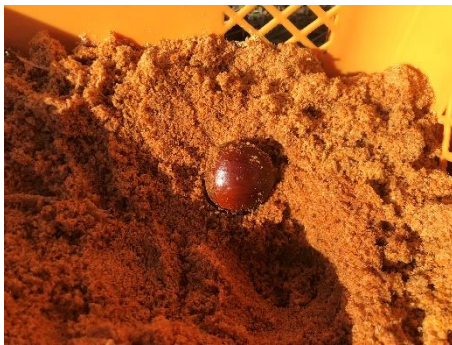
No. 5

前回、牛の残渣(ざんさ)を堆肥利用したいので発酵・熟成させてチャレンジします。
というところまで、ご報告しました。

今回は実際に苗木育成の為の畑作りをご報告したいと思います。

■ 苗木育成の時期・タイミング

- ・ 着任当初、産地振興の目的で岸根栗品種の保全・伝播の為に系統樹の苗木を増やそうと活動を始めました。
- ・ 前年に収穫した栗の実を年明け頃から播種します。直接土壌に植えることでも可能ですが、おが屑などを利用した苗床を用意すると発芽しやすいとお聞きしました。
- ・ 肥料などは必要なく、適度に灌水さえ管理していればそれほど難しくはありません。
- ・ 3月頃に根が出始め、その後4月に発芽しました。



■ 市民農園への移植

- ・ 徐々に苗木も大きくなり、これ以上の育成を行うには土壌へ移植しなくてはなりません。
- ・ 今回は市民農園の一画をお借りして移植することになりました。以前収穫されてそのままになっていた場所でしたので、開墾が大変でした。
- ・ 以前の作物の根や雑草などを取り除きながら、深く耕しましたが野菜や根菜などが必要とする深さは20~30cm、栗の場合は最大60cm、苗木とはいえできるだけ深く耕すことが健全な根の育成につながる為、ある程度の深さは必要でした。
- ・ 20cm下からは地盤が固く、土壌改良の必要性を感じました。肥料としての役目というよりは土壌改良に役立てばとの考えから、牛の残渣(ざんさ)を堆肥として投入することにチャレンジしました。



■ 残渣（ざんさ）の堆肥化

- 残渣(ざんさ)はそのまま畑に入れると農作物の病気や障害の原因になります。その為、発酵・熟成を促進させるよう米糠(こめぬか)を混ぜ1か月以上置いておきました。
- 優良な堆肥となったであろう元残渣(ざんさ)を畑に混ぜ込みました。今度は畑の土壌の中で微生物が活発な活動を行い堆肥は分解され、土壌にとどまったものが腐植として有益な働きをします。
- 腐植は土の団粒構造を形成するのに役立ち、栄養分を蓄える保肥力も強いのです。



■ 苗木の成長経過

- 堆肥を混ぜると土壌の中で微生物の繁殖が活発になるので、また1か月落ち着かせました。
- 苗床の苗は掘り出してみると根も背丈と同じくらい成長していました。
- 5月末、そろそろ頃合いです、雨が降る予報の前に植替えました。
- 1週間を過ぎ、様子を見ると驚くほど雑草が生えていて驚きました。最初は丁寧に抜いていましたが、2週間経つと畝も苗も飛び越えるぐらいの背丈まで成長してしまいます。
- 丁度、小型刈払機の講習を受けたので途中から平坦な部分は機械で刈れるようになりました。しかし、真夏が最も成長するので本当に重労働でした。



■ 苗木の今後

- 苗木をそのまま育てたのでは、岸根栗と他の品種のハーフになってしまうため、ある程度の大きさに育てば岸根栗系統樹の穂木を接木します。
- 2月にほ場へ移植し、接木を行うのは5月予定です。それまで、更に丈夫に！大きく！太く！育ってほしいです。成長が遅いと更に翌年へ持ち越しです…。